

聖書ヘブル語のいわゆる目的語の標識 'et から見た能格的階層の普遍性*

竹内茂夫

1. はじめに

世界の諸言語において、(1)のような能格的な階層が様々な文法領域に見られることが主張されている(角田 1991: 130)。

(1) 他動詞目的語 > 自動詞主語 > 他動詞主語

この階層が現れている例として、諸言語の言語の語形成および日本語の所有者敬語がある。加えて、この階層は聖書ヘブル語(以下ヘブル語)、特にいわゆる目的語の標識の現れ方にも反映されている。この小論では、(1)のような能格的な階層が諸言語にどのように現れているかを概観し、ヘブル語の現象から光を当てることによって、この階層の普遍性がより説得的なものであることを見ていきたい。

2. 語形成および所有者敬語に見られる能格的階層

ところで、(5)のような階層は、'etの現れ方に限られたものではない。これは、諸言語の様々な文法現象に反映しているかもしれないと言われている階層である(角田 1991: 130)。この階層は、語形成と所有者敬語の領域に見ることができる。

2. 1. まず第一に、(1)の能格的な階層は、語形成の領域に現れている。語形成に関しては、格標示の型が対格型か能格型かということに関係なく、一般に他動詞目的語と自動詞主語を同じように扱うという点で能格的であると言われている(柴谷 1986: 81, 83)。さらに、「能格性に関しておそらくもっとも確実な普遍特性」として、「あらゆる言語は、文以下の構成、すなわち名詞化と語構成の方式において、能格的である」(松本 1986: 180)という普遍性も提案されている。しかしながら、単に同じように扱う現象が見られるだけではない。同じように扱いつつも、ある現象は他動詞目的語と最も多く関わり、次いで自動詞主語に関わるが、他動詞主語には関わらないか、関わるとして

もごくわずかであるという階層を見ることができる。

例えば、英語および日本語における名詞と動詞から成る複合語の作りやすさに、(1)の階層が反映していることが指摘されている (Comrie 1978 : 337, 角田 1991 : 130)。英語において、[名詞+動詞の -ing 形] というタイプの複合語を作る場合、名詞が目的語である例は多くあり、非常に生産的であると言われている (Quirk et al. 1985 : 1571)。しかしながら、名詞が主語となると用例は極度に少なくなり、例えば Marchard (1969 : 76) は以下の (2b) のような3例しか考えることができないと述べている。その3例も、自動詞主語の場合であって、他動詞主語の用例は見られない。他動詞主語の例は、以下の (2c) の例しか見られない。

(2a) 他動詞目的語を含む例

fox-hunting, girl-watching etc.

(2b) 自動詞主語を含む例

cock-crowing 'dawn', cock-fighting, nose-bleeding (cf. His nose is bleeding) (以上, Marchard 1969 : 76), bird-chirping (Comrie 1978 : 337)

(2c) 他動詞主語を含む例

police beating (角田 1993)

また、日本語の場合、[名詞+動詞の連用形] という複合語を作る場合、名詞が目的語であれば (3a) を初めとして数多くの用例が見られ、有力な活発なタイプを形成していると言われている (西尾 1976:48)。⁽¹⁾ また、目的語の場合ほど多くはないが、他動詞および自動詞の主語を含むタイプが比較的に見られるようである。⁽²⁾ しかしながら、自動詞主語と他動詞主語の場合では頻度が異なり、分ける必要があると思われる。西尾が挙げている用例は全て自動詞主語であって、他動詞主語の例はない。(3c) のように他動詞主語が想定される例もあるが、極めて限定されているように見える。

(3a) 他動詞目的語を含む例

魚釣り, 格上げ, 他多数

(3b) 自動詞主語を含む例

雨漏り, 山崩れ, など

(3c) 他動詞主語を含む例

虫食い（虫が何かを食う）、神隠し（神が誰かを隠す）、利休好み（利休が何かを好む）、男好き（男が何かを好きである [男好きのする顔]）、または、女が男を好きである [男好きの女]）、猿まね（猿が人をまねる）（以上は角田 1993）、蝕む（虫が何かを食う）（宮岡 1993）

いずれにしても、複合語の形成において、他動詞目的語が最も作りやすく、次いで自動詞主語であり、他動詞主語が最も作りにくいというのは、英語においても日本語においても共通していることが分かる。

また、いくつかの言語の名詞抱合 (noun incorporation) においても、この階層が働いているとされる（宮岡 1992 : 24）。例えば、アイヌ語においては、他動詞目的語が最も抱合されやすく、次いで自動詞主語であり、他動詞主語の抱合は極めてまれであるとされる（佐藤 1992 : 196-9。以下の例文はグロスのつけかたを変えて引用）。

(4a) 他動詞目的語の抱合

ku- wákka-ku 「私は水を飲む」
自動詞1単主「水」「飲む」

(4b) 自動詞主語の抱合

ku- téke- pase 「私は（年をとって）手がなえる」
自動詞1単主「~の手」所属形「重い」

(4c) 他動詞主語の抱合

ku- kóy-yanke 「私を波が上げる」
自動詞1単主「波」「(誰へ)上げる」

一方、ナワトル語（ユート・アズテック語族）では、名詞抱合は他動詞目的語だけか、あるいは他動詞目的語と自動詞主語に限られると言われている（柴谷 1986 : 82。以下の例文も柴谷から）。

(5) 自動詞

a. tesiwi-tl weci-Ø-Ø 'Hail is falling'

hail-ABS fall-PRES-SG

b. Incorporation of S

tesiwī-weci-θ-θ 'It's hailing'

hail-fall-PRES-SG

他動詞

a. ne' ki-ca'-ki kallak-tli 'He closed the door'

he (he)it-close-PAST door-ABS

b. Incorporation of P

ne' kal-ca'-ki 'He closed the door'

he (he)door-PAST

以上、英語、日本語の複合語、およびアイヌ語、ナワトル語の名詞抱合などの語形成において(1)の階層が反映されていることを見てきた。これは、次の Comrie (1978: 337) の言葉をもって集約することができよう。「ついでながら、英語におけるこれらの [=N-V-ingタイプ]の複合語のように、名詞が動詞に編入され得る場合、P [=他動詞目的語]が最も編入されやすく、次いでS [=自動詞主語]で、A [=他動詞主語]が編入に最も抵抗することは、言語を越えて一般に正しいようである。」(□内は筆者による)

2. 2. (1)の階層は、語形成以外の領域においても見られる。日本語における所有者敬語の自然さの程度にも、類似の階層が見られることが指摘されている。すなわち、所有物が他動詞目的語(直接、間接の両者を含む)である場合には、所有者敬語が幅広く可能であるけれども、所有物が自動詞主語の場合には、所有者敬語の自然さの度合いは限定され、他動詞主語の場合には自然さの度合いが著しく低いことが指摘されている(角田 1991: 126-30。例文とアンケート調査による2点満点での平均点も引用。適格性の判断は角田による)。

(6a) 直接目的語

侍女が天皇陛下の手をお取りした。(1.5/2)

(6b) 間接目的語

侍女が天皇陛下の手にお帽子をお渡しした。(1.4/2)

(6c) 自動詞主語

天皇陛下の脚はめっきり弱くなりました。(1.3/2)

*天皇陛下の御用邸が地震でお潰れになった。(0.3/2)

(6d) 他動詞主語

?天皇陛下の穏やかな目はいつも国民の心を安らかにしていらっしゃいました (または、しておられました)。(0.8/2)

3. ヘブル語のいわゆる目的語の標識 'et の現れ方

ヘブル語において、伝統的に「目的語の標識 (object marker)」あるいは「対格の記号 (nota accusativi)」と理解されている 'et (または 'et) は、通常、定の他動詞目的語に伴う。しかしながら、同じ 'et が定の自動詞や定の他動詞の主語に伴う例がいくつも見られる。動詞の主語に現れる 'et は、通常の現象ではないと見なされて、それがどのような機能を持っているかということについて、これまでも伝統的な立場から様々な解決策が提案されている。けれども、どれも決定的であると言うことはできないように思われ、⁽³⁾ その解決は今後の課題である。しかしながら、'et の現れ方を観察すると、(1) のような能格的な階層を見ることができる。⁽⁴⁾

この 'et は、ヘブル語において10,575回現れるとされている (Wilson 1890: 141)。そのうちの大半は、もちろん (7) のように定の他動詞目的語の前に現れる。⁽⁵⁾

(7) wə-'et nəbī'ē -kā hārəgū b-e -hāreb.

& ET の預言者-PL あなたの彼らは殺したでその剣

「また、あなたの預言者たちを彼らは剣で殺しました。」(列王記 19:10, 14)

しかし、その同じ 'et が (8) のように定の自動詞主語の前に現れる文が、十数例において見られる。⁽⁶⁾

(8) wə-'et kol mibrāhā-w bə-kol 'āgappā-w b-a -hereb yippōlū.

& ET の全ての逃亡者-PL 彼の中に全ての軍隊-PL 彼でその剣 彼らは倒れる

「また、彼の全ての軍隊の中で逃れた者たちはみな剣で倒れる。」(エゼキエル書 17: 21)

また、(9) のように構文上は自動詞文と見なされる受動文の定の主語の前に 'et が現れる文が、数十例にわたって見られる。⁽⁷⁾ とりわけ、固有名詞の前には、かなりの程度で現れることが従来から言われている (Wilson 1890, Andersen 1971, Khan 1984)。

- (9) way-yiwwālēd la-hānōk 'et 'irād.
 & 彼が生まれた エノク ET 一行
 「またエノクにはイラデが生まれた。」(創紀 4:18)

さらに、非常にまれながら (10) のように定の他動詞主語の前に現れることもある (確実な例としては以下の 1 例のみ)。

- (10) wə-'et mēlākē-nū šārē -nū kōhāne-nū wa-'ābōtē-nū lō(') 'āsū
 & ET の王-PL 我らのつかさ-PL 我らの祭司-PL 我らの & の父祖-PL 我らの NEG 彼らが行った
 tōrāt-ēkā.
 の律法 あなたの
 「また、我らの王たち、我らのつかさたち、我らの祭司たち、および我らの父祖たちは、あなたの律法を行いませんでした。」(ネミ記 9:34)

以上のように、ヘブル語の 'et は、定の他動詞目的語に最もよく現れ、ついで受動文を含む定の自動詞主語にも若干現れるが、定の他動詞主語にはほとんど現れないことが分かる。

4. 他動詞目的語、自動詞主語および他動詞主語の割合の違い

これまで、(1) の能格的な階層がいくつかの言語のいくつかの文法領域にまたがって現れることを見て来た。しかしながら、他動詞目的語、自動詞主語、他動詞主語が現れる割合は、どの現象でも均一という訳ではない。例えば、(5) に挙げたナワトル語の名詞抱合では、抱合されるのは他動詞目的語だけか、あるいは他動詞目的語と自動詞主語だけであって、他動詞主語の抱合は許されていないようである。(6) に記された日本語の所有者敬語は、他動詞目的語では一般的だが、自動詞主語では限定され、他動詞主語

ではほとんどが不自然である。(2)に見られる英語の[名詞+動詞の-ing]タイプの複合語の形成は、他動詞目的語では生産的だが、自動詞主語の場合には極端に制約され、他動詞主語の例はほとんど見られない。ヘブル語の 'et も、(7)のような他動詞目的語の場合には一万近くの用例が見られるが、(8)(9)のような自動詞主語はせいぜい数十に限られ、他動詞主語の例は(10)の1例というようにほとんど見られない。これらに対して、(4)に挙げたアイヌ語の名詞抱合では、他動詞目的語を最も容易に抱合して、それに自動詞主語が続くだけでなく、極めてまれだけれども他動詞主語の抱合を許す例があるようである。また、(3)のような日本語の[名詞+動詞の連用形]という複合語の場合、名詞が他動詞目的語であるタイプは確かに活発だけれども、自動詞主語の例も上記の諸現象と比べてみると、それほど少ないという訳ではない(西尾のデータからは、他動詞目的語との比はほぼ4:1であることが分かる)。それだけでなく、他動詞主語の例もいくつか見ることができる。以上のことから、(1)の階層は確かに上記のどの文法現象にも反映されているけれども、すべての現象に同じような割合で現れている訳ではないということが分かる。すなわち、自動詞主語に関しては、英語の複合語のように非常に少ないものから、日本語の複合語のようにかなり多く現れるものまで幅がある。ヘブル語の 'et は、その中では少ないほうに属しよう。また、他動詞主語は、ナワトル語の名詞抱合のようにその参加を許さないものから、日本語の複合語のようにある程度許容するものまで幅がある。ヘブル語の 'et は、他動詞主語がほとんど許容されない部類に属する。

5. まとめ

これまで見てきたことから、次のように言うことができよう。(1)の他動詞目的語 > 自動詞主語 > 他動詞主語という能格的な階層は、これまで英語、日本語、アイヌ語、ナワトル語などの語形成および日本語の所有者敬語に反映されていると言われて来た。それだけでなく、その階層はヘブル語の 'et の現れ方にも反映されている。言い換えれば、この階層は、系統的に全く関係のない諸言語の間の、形態論から統語論に至る幅広い文法領域において見られる普遍的な階層であるという可能性が、ヘブル語の 'et の現れ方にも反映されていることによって、一歩確実になったということが出来る。

[注]

*本稿は、日本言語学会第105回大会（関西外国語大学、1992.10）での研究発表をもとに、加筆修正したものである。様々な有益なコメントを下された方々に感謝致します。

- 1) 西尾（1976：41, 47）によれば、『明解国語辞典』（昭和27年改訂一版）の中に現れる〔名詞+動詞連用形〕タイプの1591例の複合語のうち、544例が「ヲ」（もちろん、「ヲ」が常に目的語を表すとは限らないが）を想定できるとする。
- 2) 西尾（1976：41, 47）によれば、1591例のうち161例が「ガ」（すべて主語であるとは限らないかもしれないが）を想定できるとする。
- 3) ヘブル語の 'et が主語と共に現れるような構造に関しては、これまで次のように主張されている。(1) テクストのくずれ (textual corruption) または書記の書き間違いと判断されるので、修正または削除されるべきである (Kautzsch and Cowley 1910, Albrecht 1929, Blau 1954, Muraoka 1985)。(2) 「対格の中にあると意識されて」いる。その理由は、省略された他動詞または隣接する節の他動詞の支配 (rection) への牽引 (attraction) のためか (Kautzsch and Cowley 1910, Blau 1954), もしくは他動詞文と受動文または使役文と自動詞文の「混成 (Kontamination)」のためである (Brockelmann 1931, Blau 1954)。(3) 何らかの「強調」を与える再帰代名詞 (例えば、英語の oneself) のような要素である (Walker 1955, Macdonald 1964, Saydon 1964, Waltke and O'Connor 1990)。
- 4) 能格的な階層が見られるということからすれば、広い意味でヘブル語にも能格性があるということではできる。しかしながら、格標示は能格型ではなくて基本的には対格型である。最近の 'et が能格の標識であるという主張 (Müller 1985, 1988, 1989, Waltke and O'Connor 1990) は、誤っていると言わざるを得ない。というのは、'et は他動詞目的語と自動詞主語の標識であって、他動詞主語のための標識ではないからである。それに対して、'et が非動作格として動格型の格標示をしていると考えることはできるものと思われる (Khan 1984, Garr 1991, 竹内 1992)。
- 5) しかしながら、常にではない。特に、抽象名詞の他動詞目的語の前にはしばしば現れない (Wilson 1890：215-6, Khan 1984：472)。また、詩文においては散文よりも登場が少なく、詩文に現れる 'et の機能の研究も課題の一つである。
- 6) (8) 以外では「誰かの物になる」：𐤀𐤂𐤁 5:10, 𐤀𐤂𐤁𐤅𐤍 35:10, 「悪くなる」：𐤀𐤂𐤁𐤅𐤍 11:25, 「わずかになる」：𐤀𐤂𐤁𐤅𐤍 9:32, 「弱くなる」：𐤀𐤂𐤁𐤅𐤍 20:8, 「汚れる」：𐤀𐤂𐤁𐤅𐤍 3:9, 「落ちる」：𐤀𐤂𐤁𐤅𐤍 6:5, 「倒れる」：𐤀𐤂𐤁𐤅𐤍 20:44, 「座る」：𐤀𐤂𐤁𐤅𐤍 44:3, 「離れる」：𐤀𐤂𐤁𐤅𐤍 9:19, 「くっつく」：𐤀𐤂𐤁𐤅𐤍 29:4, 「来る」：𐤀𐤂𐤁𐤅𐤍 9:13, 𐤀𐤂𐤁𐤅𐤍 17:34など。このうち、大半が無生名詞を主語としていることに注目する必要がある。
- 7) 以下に挙げた箇所は網羅的ではない。また、どのような条件で 'et が受動文の主語の前に現れるかということに関する細かいメカニズムの研究は、今後の課題である。「生まれる」(cf. Andersen 1971)：𐤀𐤂𐤁𐤅𐤍 21:5, 40:20, 𐤀𐤂𐤁𐤅𐤍 16:4, 5, 𐤀𐤂𐤁𐤅𐤍 26:60, 2𐤀𐤂𐤁𐤅𐤍 21:22, 「食べられる」：𐤀𐤂𐤁𐤅𐤍 21:28, 𐤀𐤂𐤁𐤅𐤍 12:22, 「燃やされる」：𐤀𐤂𐤁𐤅𐤍 36:22 (cf. Keenan 1976：331), 「探される」：𐤀𐤂𐤁𐤅𐤍 50:20, 「見つけられる」：𐤀𐤂𐤁𐤅𐤍 50:20, 「乳離れさせられる」：𐤀𐤂𐤁𐤅𐤍 21:8, 「割り当てられる」：𐤀𐤂𐤁𐤅𐤍 26:55 (cf. Keenan 19

76:325), 「持ち去られる」: 林7書 10:6, 「洗われる」: レビ記 13:55(2回), 「油注がれる」: 民数記 7:10, 「告げられる」: 創世記 27:42, 2サムエル記 21:11, エレミヤ書 9:24, 列王記 18:13, エサヤ書 9:24, 「上げられる」: 申命記 25:28, 「与えられる」: 創世記 29:27, 民数記 32:5, 列王記 2:21, 2列王記 18:30, 「まっすぐにされる」: エレミヤ書 35:14, 「呼ばれる」: 創世記 17:5。

[参考文献]

- Albrecht, K. 1929. "'t vor dem Nominativ und beim Passiv," Zeitschrift für die alttestamentliche Wissenschaft 47: 274-83.
- Andersen, Francis I. 1971. "Passive and ergative in Hebrew," in H. Goedicke (ed.), Near Eastern studies in honor of William Foxwell Albright, 1-15. Baltimore: Johns Hopkins University Press.
- Blau, Josua. 1954. "Zum angeblichen Gebrauch von 't vor dem Nominativ," Vetus Testamentum 4: 7-19.
- Brockelmann, C. 1931. "Die Objektkonstruktion der Passiva im Hebräischen," Zeitschrift für die alttestamentliche Wissenschaft 49: 147-9.
- Comrie, Bernard. 1978. "Ergativity," in W. P. Lehmann (ed.), Syntactic Typology, 329-94. Austin, Texas: University of Texas Press.
- Garr, W. Randall. 1991. "Affectedness, aspect, and Biblical 'et," Zeitschrift für Althebraistik 4: 119-34.
- Kautsch, E. and A. E. Cowley. 1910. Gesenius' Hebrew grammar. 2nd English edition. Oxford: Clarendon Press.
- Keenan, Edward L. 1976. "Towards a universal definition of "subject"," in Charles N. Li (ed.), Subject and topic. 303-33. New York: Academic Press.
- Khan, G. A. 1984. "Object markers and agreement pronouns in Semitic languages," Bulletin of the School of Oriental and African Studies 47: 468-500.
- Macdonald, John. 1964. "The particle 't in classical Hebrew: Some new data on its use with the nominative," Vetus Testamentum 14: 264-75.
- Marchand, Hans. 1969. The categories and types of present-day English word formation: A synchronic-diachronic approach. 2nd edition. München: Beck.
- 松本克己. 1986. 「能格性に関する若干の普遍特性—シンポジウム「能格性をめぐって」を締めくくるために—」『言語研究』90: 169-90.
- 宮岡伯人. 1992. 「環北太平洋の言語」宮岡伯人編『北の言語: 類型と歴史』所収, 3-65. 東京: 三省堂.
- 宮岡伯人. 1993. 1993.6.2集中講義のレジメ.
- Müller, Hans-Peter. 1985. "Ergativelemente im akkadischen und althebräischen

- Verbalsystem," Biblica 66: 385-417.
- Müller, Hans-Peter. 1988. "Das Bedeutungspotential der Affirmativ-konjugation," Zeitschrift für Althebraistik 1: 74-98, 159-90.
- Müller, Hans-Peter. 1989. "Die Konstruktionen mit hinnē „siehe" und ihr sprachgeschichtlicher Hintergrund," Zeitschrift für Althebraistik 2: 45-76.
- Muraoka, T. 1985. Emphatic words and structures in Biblical Hebrew. Jerusalem: Magnes Press / Leiden: Brill.
- 西尾寅弥. 1976. 「造語法と略語法」鈴木孝夫編『日本語の語彙と表現』(日本語講座第四卷)所収, 27-62. 東京: 大修館書店.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. 1985. A comprehensive grammar of the English language. London: Longman.
- 佐藤知己. 1992. 「「抱合」からみた北の諸言語」宮岡伯人編『北の言語: 類型と歴史』所収, 191-201. 東京: 三省堂.
- Saydon, P. P. 1964. "Meanings and uses of the particle 't," Vetus Testamentum 14: 192-210.
- 柴谷方良. 1986. 「能格性をめぐる諸問題」『言語研究』90: 75-96.
- 竹内茂夫. 1992. 「聖書ヘブル語の主語に伴う目的語の標識 'ēt-動格型格組織における非動作格の現れー」『ことばのアスペクト』6: 1-17.
- 角田太作. 1991. 『世界の言語と日本語』東京: くろしお出版.
- 角田太作. 1993. 1993.4.19授業用のレジメおよびコメント.
- Walker, Norman. 1955. "Concerning the function of 'ĒTH," Vetus Testamentum 5: 314-5.
- Waltke, Bruce K. and M. O'Connor. 1990. An introduction to Biblical Hebrew syntax. Winona Lake, Indiana: Eisenbrauns.
- Wilson, Alfred M. 1890. "The particle 'ēt in Hebrew," Hebraica 6: 139-50, 212-24.

Universality of an ergative-like hierarchy in the light of usages of the
so-called object marker 'e_t in Biblical Hebrew

Shigeo Takeuchi

Some linguists claim that there is in several languages an ergative-like hierarchy, i.e. the transitive object > the intransitive subject > the transitive subject. They suggest this hierarchy would be an universal phenomenon. It can be seen in the word-formations such as compound nouns consisting of a noun plus a verb (Comrie) and noun incorporation (Miyaoaka) and in honorific possession (Tsunoda). Such an ergative-like phenomenon can be also recognized in Biblical Hebrew, especially in the usage of the so-called object marker 'e_t. The 'e_t usually occurs before the definite transitive object. In addition, it sometimes appears before the definite intransitive (including passive) subject and very rarely before the definite transitive subject. Thus, we can see the ergative-like hierarchy also in Biblical Hebrew. This fact would make the theory of the universality of the hierarchy more convincing.

(原稿受理日 1993年8月25日)